

テーマ	子どもが学びをデザインする授業の在り方～原体験からの脱却～
発表者 (所属)	企画者：上條大志（小田原市教育委員会） 司会者：上條大志（小田原市教育委員会） 話題提供者：片岡寛仁（小田原市立酒匂小学校） 高橋達哉（東京学芸大学附属世田谷小学校） 北森 恵（富山県公立小学校） 指定討論者：阿部利彦（星槎大学大学院教育実践研究科）
<p>【発表概要】</p> <p>【企画趣旨】</p> <p>多様な子どもたちが共に学び合う学級には、多様な教育的ニーズがある。学習障がいや発達障がい、言語・文化の違いだけでなく、さまざまな個性に応じた教育が求められている。なぜなら、教育の目的は、「人格の完成を目指し」と教育基本法に定められているからである。</p> <p>しかしながら、一斉指導や管理型の指導スタイルなど、教師の原体験に基づいた、あるいは教師主導の画一的な授業が展開されて続けている。そのような教育環境下では、さまざまな個性に応じた教育を実現すること、そして一人ひとりの子どもの資質・能力を最大限に引き出すことは難しい。</p> <p>本シンポジウムでは、これまでの教師主導の画一的な授業ではない「子どもが学びをデザインする授業の在り方」について深く掘り下げていく。実際に教育現場で活躍する3人の実践家を招き、子どもが学びをデザインする授業づくりについて話題提供していただく。参加者の皆さんと共に、これからの授業の形を考える貴重な機会となることを期待している。</p> <p>【話題提供】</p> <p>話題提供者Ⅰ 「挑戦としくじりから見えてきた 教師の出番や役割とは」 小田原市立酒匂小学校 片岡寛仁</p> <p>「インクルーシブ教育」「令和の日本型学校教育」「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」様々な大義名分のもと、「対面とオンラインでのハイブリッド授業」「単元の一部を自由進度学習にする」「児童だけで学び合う時間の確保」「児童自らが授業を計画し学び合う時間」に挑戦してきた。これらの取り組みは、多くの児童にとって新鮮で刺激があり学習への意欲を一層高める事につながるが多かった。その一方で教師自身の理解・調整・説明不足が児童に混乱をきたすこともあった。</p> <p>挑戦としくじりを繰り返す中で見えてきたことがある。例えば自分が意識して取り組んできたことは授業の「ユニバーサルデザイン」ではなく、「バリアフリー」にな</p>	

っていたということ。児童が進んで学びをデザイン・調整するにはまず教師の環境調整が不可欠であること。例えば「人的・時間的・空間的環境、学びの進度・内容・方略」。これらに気づかせてくれたのは、児童の本音や仲間の先生方からの学びである。多様な子の個性を生かし、「子ども自らがデザインする授業」について実践を通して学んだ教師の出番や役割について提案させていただき、参加者のみな様と共に学び合いたい。

話題提供者 2 「一斉指導はダメなのか？ 教師主導はダメなのか？」

東京学芸大学附属世田谷小学校 高橋達哉

ここ数年、「一斉指導ではなく、個別学習へ」、「教師主導ではなく、学習者主体へ」という論調が強いように感じる。実際、7月に所属校で、一斉授業形式による国語授業を公開した際にも、「今日の授業は、教師が話し合いを主導する一斉授業の形態だったが、今求められている授業の在り方について、どう考えているか？」という質問を受けた。また、本シンポジウムの「企画趣旨」にも、「一斉指導や管理型の指導スタイルなど、教師の原体験に基づいた、あるいは教師主導の画一的な授業が展開されて続けている」と、「一斉指導」や「教師主導」を否定するようにも受け取れる記述がある。

本当に、一斉指導はダメなのだろうか。教師主導はダメなのだろうか。私は、そうではないと考えている。目的が「さまざまな個性に応じた教育を実現すること、そして一人ひとりの子どもの資質・能力を最大限に引き出すこと」だとすれば、その手段として、「一斉指導」や「教師主導」を選択することがあってもいい。むしろ、「一斉指導」や「教師主導」は、「自ら学びをデザインする子ども」を育む上で、欠かせないと考えている。

シンポジウムでは、国語科の授業実践と、授業を支える学習集団づくりの実践を通して、私が、今求められている授業の在り方をどのように捉え、どのように向き合おうとしているのかについて、話題提供したい。

話題提供者 3 「UDL 実践 5 年目の現在地」

富山県公立小学校 北森 恵

学びのユニバーサルデザイン (UDL) は、学習環境の中に含まれる学びのエキスパートを育てる上での根本的な障壁、つまり、融通が利かず、全員一律で対応させようとさせるようなカリキュラムに対処するための枠組みである。融通の利かないカリキ

ユラムの中では、子供たちには様々な障壁が立ちはだかる。UDL では、それらを取り除くためのオプションを用意し、学習の GOAL と WHY を明確に示した上で、子供たちがそれぞれの学び方を選択してくように環境をデザインする。担任は、子供たちが学びに向かえているかを見守り、時にオプション（手立て）の提示をし、子供たちの選択へのフィードバックを行う。（UDL Guidelines Version 2.0）

と、言葉で述べるのはとても簡単だが、実践5年目の私はまだまだ子供たちに十分な学習環境を準備できているとはいえない。しかし、それでも、子供たちの学ぶ姿には目を見張るものがある。

日々、どのような準備をし、どのように授業をしているのかという具体的な事例や、よく受ける質問を元に実践報告を行う。

キーワード：多様性、個別最適な学び、授業づくり、UD、UDL